

## 新潟大学全学英語教育カリキュラム改定の成果検証 (3)

### — クォーター制導入に伴う変化に着目して †

ハドリー浩美\*

新潟大学教育・学生支援機構コモンリテラシーセンター\*

本稿では、2011年度に改定された新潟大学全学英語教育カリキュラムの成果検証に関する継続研究として、クォーター制が導入された2017年度および2018年度の検証を試みた。使用したデータはTOEIC IPスコア、e-learningによる課外学習時間、学生による授業評価、教員による成績評価、クラス・サイズであった。導入前の調査結果との比較から、TOEIC IP平均値の伸長および学生の授業に対する「達成感」「満足感」の上昇が確認された。他方、「自学自習」の時間数がかなり減少するとともに、「自学学習」と「成績」との間に負の相関関係が確認され、これに関する質的調査の必要性が示唆された。

キーワード：英語教育カリキュラム成果検証、クォーター制、TOEIC、課外学習、学生による授業評価

#### 1. 背景と目的

新潟大学では、2011年度に全学英語教育カリキュラム改定を行い、質的改善（一般学術目的の英語運用能力の育成）および量的改善（1年次のコマ数倍増、e-learning教材による課外学習の促進）に取り組んできた（新潟大学全学教育機構英語教育企画開発室 2010）。2014年度末で1年生から4年生までが改定後のカリキュラムで英語を学修したことから、ハドリー（2016）では、改定初年度から4年間（2011年度～2014年度）のTOEIC IP、課外学習状況、学生による授業評価、教員による成績評価等のデータを分析することにより、2011年度改定カリキュラムによる成果を検証した。ハドリー（2018）ではその手法を踏襲し、2015年度および2016年度の成果を検証した。翌2017年度のクォーター制導入により、第1学期開講の2科目が第1ターム・第2タームに分割され、授業回数および単位数が従来の半分となった（週1コマ×8回、0.5単位）。

本稿の目的は、全学英語教育カリキュラムの経年的な教育効果を、2017年度から2018年度を一区切りとして、上記の指標から多面的に明らかにすることにある。そのため、過去2回の分析との比較が可能となるよう、分析の対象は1年次の必修科目とする。同時に、本稿で

はクォーター制導入に伴う変化にも着目する。2016年度に実施された第53回国立大学教養教育実施組織会議の調査によると、国立大学での導入目的としては教育効果の向上という回答が最多であったという（西本 2017）。導入済みの大学からは、クォーター制導入後における授業外学習時間の増加（小川 2016、近田 2018）が報告されている。中釜（2019）では、授業外学習の作業量に対する学生の適応度を二次的指標として用い、適応度が Semester 制と同レベルであっても授業外学習時間が増加することを示している。授業の満足度に関しては、小川（2016）では僅かに低下したこと、今滝ほか（2019）では有意差が認められなかったことが報告されている。本稿が、日本の大学におけるクォーター制の効果検証という、まだ歴史が浅い研究の一助となることを願うものである。

#### 2. クォーター制導入後の全学英語科目および標準的な履修パターン

改定前の2005年度から2010年度までの全学英語教育カリキュラムにおける英語科目および標準的な履修パターンに関してはハドリー（2016）を、改定後の2011年度から2016年度までについてはハドリー（2018）を

参照されたい。今回分析の対象とした、クォーター制移行後の2017年度および2018年度における全学英語科目および標準的な履修パターンは次のとおりである。

第2タームが学外学修を中心とする特別タームとされたことから、1年生向けの第1学期開講科目はすべてターム開講とした。具体的には、移行前の「アカデミック英語（リーディング）」が二等分され、学生は第1タームに「アカデミック英語R1」、第2タームに「アカデミック英語R2」（各0.5単位）を履修することになった。同様に、「アカデミック英語（リスニング）」は第1ターム開講の「アカデミック英語L1」と第2ターム開講の「アカデミック英語L2」（各0.5単位）とに分割された。なお、いずれも授業内容は移行前のそれを引き継ぎ、R1とR2、L1とL2は同一の教員が同一教材を用いて担当し、履修者もほぼ同一であった。したがって、実質的には、クォーター制移行前の科目に「中間試験」を加えたような形態となった。担当教員は、移行前と同様、リーディング科目は日本語母語話者、リスニング科目は主に英語母語話者教員であった。クラス編成についても従来通り、1年次第1学期には入試成績等により、第2学期には7月に受験したTOEIC IPスコアに基づいて学部別・習熟度別におこなわれた。

第2学期はひきつづきセメスター開講とし、1年生は「アカデミック英語W」（1単位、上位クラスは英語母語話者教員、下位クラスは日本語母語話者教員が担当）および「基礎英語」（1単位、日本語母語話者教員が担当、TOEIC 470以上で単位認定）を履修した。

加えて2017年度からは、全学の1年生希望者を対象とする集中英語コース「iStep」（アイスステップ、Intensive-Short Term English Program）が開講され、iStep 修了者にはその上位科目である iStep Continuation科目群の履修が奨励された。iStepは、経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援事業で3学部を対象に開発された「S.P.A.C.E.」（Skills Program for Academic and Content English）をもとに発展的に導入されたプログラムである。

このほか、中上級の選択科目として「発展英語」「応用英語」がひきつづき開講されるとともに、2018年度には学部の専門英語へのスムーズな接続を図る「EAP」科目群が2年生以上を対象に開講された。

シラバスに関しては、移行前と同様、「発展英語」では「科目のねらい」「学習の到達目標」の項目が、「アカデミック英語」科目群ではそれに加えて「科目の概要」の項目が統一された。具体的な授業計画や成績評

価、使用教材についても、移行前と変化はなかった。すなわち、専門や個性を十分に生かせるよう担当教員に一任されたが、「アカデミック英語R1」および「アカデミック英語R2」「基礎英語」では、全クラスにてe-learningによる課外学習を20%の割合で成績に反映させた。

### 3. 方法

TOEIC IP スコア、NetAcademy を使用した課外学習時間数、学生による授業アンケート調査の結果を主な指標として成果を検証した。

#### 3.1. TOEIC IP テスト

履修者の英語運用能力を把握するために、新1年生全員が1年次7月に受験するTOEIC IPテストのスコアについて、各年度の平均値を求めて分散分析を行った。ただし、すでにTOEICを受験して単位認定を受けた学生、および英語を選択しなかった法学部の学生は受験を免除されたほか、個人的な事情で受験できなかった学生も若干存在した。

#### 3.2. ネットワーク型英語学習教材 NetAcademy

大学における授業時間が限られている現状にあって、英語運用能力を強化するためには課外での学習が必須であることから、履修者の課外学習状況を反映するデータとして、1年生全員のe-learning教材による学習総時間数を分析した。これは、システム内に記録されている各コースの学習履歴から学習時間を出力して合計した時間数である。なお、2017年度からはALC NetAcademy2に代えてALC NetAcademy NEXTを使用することになったが、旧教材同様、第1学期は「アカデミック英語R1」および「アカデミック英語R2」にて、第2学期には「基礎英語」にて課外学習として必修とし、それぞれ20%の割合で成績に反映させた。

#### 3.3. 学生による授業評価

履修者がどのように授業および履修者としての自己を評価しているかを把握するために、新潟大学教育・学生支援機構学位プログラム支援センターが実施した「授業アンケート」のデータを分析した。

##### 3.3.1 科目別満足度の推移

まず、「授業アンケート」の項目番号18「この授業を受講して総合的に満足している」かどうかについてその推移を観察した。その際、再履修者専用クラスは除外した。また、2018年度第2学期からアンケート項目が改定されたため、「アカデミック英語W」については2018年度のデータが欠損している。なお、クォー

## [論文]

ター制が導入された 2017 年度以降のリーディングおよびリスニング科目については、第 2 タームの「アカデミック英語 R2」および「アカデミック英語 L2」終了時に、第 1 タームの「アカデミック英語 R1」「アカデミック英語 L1」をも対象に含むかたちでアンケート調査が実施された。

回答形式は 5 段階評価となっており、「非常にあてはまる」を 2、「ややあてはまる」を 1、「どちらともいえない」を 0、「あまりあてはまらない」を -1「全くあてはまらない」を -2 として平均値をとった。

### 3.3.2 2017 年度の授業評価

つぎに、2017 年度の学生による授業評価を分析した。過去 2 回の分析では直近の年度のデータを使用したため、2018 年度第 2 学期にアンケート項目が改定されたため、今回は 2017 年度のデータを使用することにした。アンケートの提出がなかった「アカデミック英語 R2」2 クラス、「アカデミック英語 L2」1 クラス、「アカデミック英語 W」3 クラスの計 6 クラスは、分析から除外した。

#### (1) 2017 年度授業評価項目等の記述統計量

アンケートの項目番号 1, 4, 15, 18 がそれぞれ「出席状況」「自学自習」「達成感」「満足度」を測定するものとみなし、齊田 (2009) に倣って、クラスごとに平均値を集計して分析に用いた。各項目のアンケート調査票上の表記は次のかぎ括弧内のとおりである。

項目番号 1 「この授業にはどのくらい出席しましたか」(出席状況)

項目番号 4 「この授業に関して、授業時間外にどれくらい自学自習しましたか」(自学自習)

項目番号 15 「この授業の達成目標は、達成された」(達成感)

項目番号 18 「この授業を受講して総合的に満足している」(満足度)

各項目の回答形式は 5 段階評価となっており、「非常にあてはまる」を 2、「ややあてはまる」を 1、「どちらともいえない」を 0、「あまりあてはまらない」を -1、「全くあてはまらない」を -2 として平均値をとった。出席状況については、全回出席、1~2 回欠席、3~4 回欠席、5 回欠席、6 回以上欠席、から選択するようになっており、順に 2, 1, 0, -1, -2 の数値に置き換えた。自学自習については、授業

一コマ (90 分) あたり 4 時間, 3 時間, 2 時間, 1 時間, ほとんどしない, という回答を、順に 2, 1, 0, -1, -2 に置き換えた。

これらの 4 項目に加え、担当教員による成績評価 (0~100 点) および TOEIC IP スコアのクラスごとの平均値と、各クラスの履修者数を分析に加えた。なお、上述のとおり 2017 年度には、第 2 タームの「アカデミック英語 R2」および「アカデミック英語 L2」終了時にアンケート調査が実施されたため、「成績」に関してもリーディング科目は R2, リスニング科目は L2 の評価点をデータとして用いた。リーディング科目では NetAcademy NEXT の課外学習を 20% の割合で成績に反映させたが、リスニング科目およびライティング科目ではすべて各担当教員の裁量に任された。

#### (2) 2017 年度授業評価項目等の相関係数

「出席状況」「自学自習」「達成感」「満足度」「成績」「TOEIC IP」「履修者数」の 7 項目についてピアソンの積率相関係数を求めて分析した。

## 4. 結果と考察

### 4.1. TOEIC IP テスト

#### 4.1.1 全体的な結果

表1は、2017年度および2018年度入学者のTOEIC IP テストの結果と全国の国立大学1年生の平均値とを、2016年度までの表 (ハドリー 2018) に追加したものである。分散分析では有意差が認められ ( $F(7, 17847) = 51.389, p < .001$ ), Tukey法による多重比較では、2011年度から2013年度まで、および2016年度から2018年度までの間に統計的に有意な上昇が続いたことがわかった。クォーター制移行後については、上述のとおり第1タームの期末試験が「中間試験」の役割を担うことになり、それにより履修者の英語学習が促進されたのかもしれない。近田 (2018) では、学生アンケート調査の自由記述欄に、クォーター制により試験対策中心の学習になりやすいとの記述があった一方で、知識を定着させやすくなったという記述もみられたと報告されている。

得点のばらつきは2016年度にはいったん縮小したものの、2017年度 2018年度にはふたたび拡大傾向にある。ひきつづき習熟度別クラス編成により、レベルに合った指導をおこなう必要があると考えられる。

国立大学1年生の全国平均と比較すると、新潟大学の1年生の平均値は2011年度から順に約5点、18点、26

点, 35点, 21点, 28点, 31点, 39点上回っている(国際ビジネスコミュニケーション協会TOEIC運営委員会作成資料(2012, 2013, 2014, 2015, 2016, 2017, 2018, 2019)).

表1 TOEIC IP スコアの記述統計量

年度	受験者数	平均値 ( )内は 国立大学 平均値	標準 偏差	最小値	最大値
2005	2199	427.8	108.7	145	910
2006	2193	426.1	109.5	90	945
2007	2214	431.3	108.1	150	975
2008	2225	417.4	107.7	150	955
2009	2246	428.7	113.0	15	960
2010	2208	452.7	114.9	145	975
2011	2249	456.9 (452)	115.3	145	980
2012	2236	468.8 (451)	115.5	145	955
2013	2226	482.1 (456)	118.3	145	965
2014	2243	489.8 (455)	123.1	145	975
2015	2251	482.5 (462)	123.7	10	960
2016	2261	489.0 (461)	112.5	135	975
2017	2204	501.3 (470)	122.4	100	980
2018	2186	516.0 (477)	126.6	10	980

#### 4.1.2 学部(学科)別の結果

学部(学科)別平均値でみると, 医学部医学科が最も高く経済学部夜間主コースが最も低い傾向が続いている。2017年度および2018年度では, 医学部医学科の平均値が順に638.2(標準偏差144.5), 660.8(標準偏差146.1)であったのに対し, 経済学部夜間主コースの平均値は320.4(標準偏差105.5), 334.7(標準偏差87.4)であった。

新カリキュラム移行後における学部内での最大値と最小値の差は依然として工学部で最も大きく, 2011年度の差は800, 2012年度810, 2013年度820, 2014年

度805, 2015年度825, 2016年度770, 2017年度770, 2018年度815であった。

#### 4.2 ネットワーク型英語学習教材 NetAcademy

1年生の NetAcademy による一人当たりの年間課外学習時間は, 表2のとおりであった。これは総時間数を単純に入学者数で割ったものである。なお, 2014年度から2016年度については, 医学部・工学部・法学部の実践英語プログラム S.P.A.C.E.選抜履修者には NetAcademy2 による課外学習が免除されたため, 入学者総数から S.P.A.C.E.履修者数を差し引いて計算した。

クォーター制移行と同時に, NetAcademy2 が廃止され, 代わりに NetAcademy NEXT が導入されたが, 一人当たりの年間学習時間数が減少していることがわかった。NetAcademy2 では, 聴解・読解力・語彙・文法等をレベルに応じて幅広く学習することが可能であった。それに対して NetAcademy NEXT では, 比較的安価な TOEIC テスト対策を目的としたコースしか導入できなかったことが背景にあり, それが学習時間の減少につながったのではないかと推測される。

表2 NetAcademy  
一人当たりの年間学習時間数

年度	時間数	教材名
2011	8時間40分	NetAcademy 2
2012	14時間44分	NetAcademy 2
2013	16時間28分	NetAcademy 2
2014	15時間10分	NetAcademy 2
2015	15時間34分	NetAcademy 2
2016	16時間47分	NetAcademy 2
2017	11時間36分	NetAcademy NEXT
2018	10時間06分	NetAcademy NEXT

#### 4.3 学生による授業評価

##### 4.3.1 科目別満足度の推移

図1は, 「授業アンケート」の項目番号18「この授業を受講して総合的に満足している」かどうかについての科目別平均値の推移を示したものである。アカデミック英語全科目において満足度が上昇傾向にある。リスニング科目およびライティング科目の満足度は, カリキュラム改定当初から「やや満足している」レベルをコンスタントに超えていたが, リーディング科目も2017年度はついに「やや満足している」レベルに達した。同年度からリーディングおよびリスニング科目

がターム開講となったが、そのことが数値の上昇に何らかの影響を与えているのだろうか。今後の推移を注視したい。

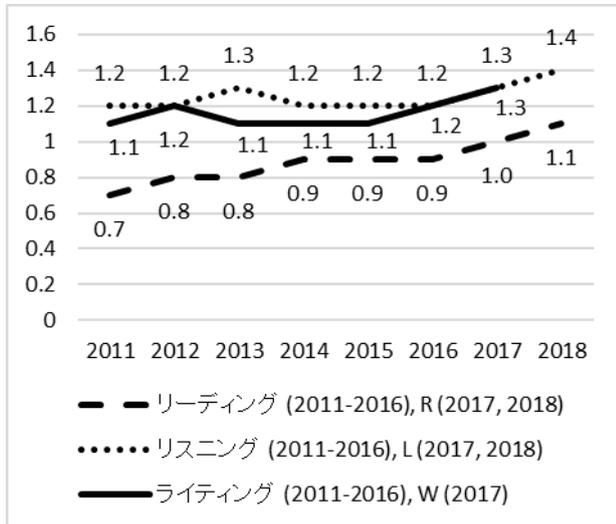


図1 アカデミック英語科目群 満足度

#### 4.3.2 2017 年度の授業評価: 授業評価項目等の記述統計量

表3はアカデミック英語3科目、190クラスにおける「出席状況」「自学自習」「達成感」「満足度」「成績」「TOEIC IP」「履修者数」の記述統計量を示したものである。アンケートの提出がなかった6クラス（「アカデミック英語 R」2クラス、「アカデミック英語 L」1クラス、「アカデミック英語 W」3クラス）は分析から除外した。

「出席状況」の平均値は前回の調査と変わらず1.59（ハドリー2018）で歪度も負であることから、ひきつづき良好であるといえよう。「達成感」および「満足度」の平均値は、順に2014年度1.02, 1.07, 2016年度1.10, 1.12, 2017年度1.20, 1.20と、緩やかではあるが着実な上昇がみられる（ハドリー2016, 2018）。一方で、「自学自習」に関しては前々回（0.60）、前回（0.69）の調査でも低めであったが、今回は-0.67にまで急落した。筆者が担当している英語自律学習支援活動や短期海外研修オリエンテーション等にて、クォーター制に移行してから学生が多忙化している印象を受けることがある。クォーター制導入によりタイトな時間管理が要求される中、短時間に集中して英語の自学自習に取り組む学生や、逆に自学自習に時間を割かない学生が増えてきたのだろうか。英語科目以外でも「自学自習」時間の減少傾向がみられるのかどうか、気になる

ところである。

表4には、科目別の平均値および標準偏差を示した。「達成感」および「満足度」の平均値には、いずれの科目においても上昇傾向が認められる。「達成感」は、リーディング科目で2014年度0.90, 2016年度0.96, 2017年度1.10, リスニング科目で順に1.05, 1.10, 1.20, ライティング科目で1.09, 1.20, 1.27であった。「満足度」は、リーディング科目で0.89, 0.90, 1.03, リスニング科目で1.22, 1.23, 1.28, ライティング科目で1.11, 1.20, 1.27と推移した（ハドリー2016, 2018）。改定から8年を経て全学英語教育カリキュラムが安定的に運営され、担当教員が自らの授業改善に時間を費やす余裕が生じているのではないかと推測される。

他方、「自学自習」の減少は全科目で発生していることが確認された。自学自習の時間数を科目別に比較すると、前回、前々回の調査と同様、リーディング科目で最大、つづいてライティング科目、リスニング科目の順となった。

ここで分析にあたり問題となるのが、「この授業に関して、授業時間外にどれくらい自学自習しましたか」というアンケート調査票の文言である。正課科目では、1単位の授業で週1時間、2単位の授業では週4時間の課外学習が前提となっているが、とりわけ英語科目では、その大部分が担当教員から課される宿題（リーディング科目ではNetAcademyを使用した学習を含む）をこなすことに費やされると思われる。それを自学自習の一部と解釈するかどうかで、回答結果が異なってくるのではなかろうか。

「出席状況」は第2学期開講のライティング科目で低くなっている。2016年度には他の科目に近づくまで改善したものの、今回の調査では2014年度並みに低下してしまった。第2学期には入学当時の緊張感が薄れてしまうのが一因かもしれない。

表3 2017年度授業評価項目等の記述統計量

	クラス数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	歪度	尖度
出席状況	190	1.00	2.00	1.59	0.21	-0.71	0.03
自学自習	190	-1.60	0.60	-0.67	0.42	-0.06	-0.18
達成感	190	0.10	1.80	1.20	0.30	-0.75	0.66
満足度	190	-0.10	1.80	1.20	0.37	-0.90	0.95
成績	190	62.40	95.80	81.88	6.42	-0.29	0.15
TOEIC IP	190	85.20	711.80	493.99	94.32	-0.55	1.34
履修者数	190	18.00	45.00	33.80	6.43	-0.27	-1.09

表4 2017年度アカデミック英語科目別授業評価項目等の平均値 (標準偏差)

科目名	出席状況	自学自習	達成感	満足度	成績	履修者数	対象クラス数 (総クラス数)
R	1.68 (0.16)	-0.46 (0.36)	1.10 (0.25)	1.03 (0.33)	80.44 (6.82)	38.39 (3.47)	56 (58)
L	1.68 (0.15)	-0.94 (0.36)	1.20 (0.32)	1.28 (0.43)	84.68 (6.16)	38.30 (0.36)	57 (58)
W	1.46 (0.22)	-0.63 (0.39)	1.27 (0.30)	1.27 (0.31)	80.86 (5.68)	27.13 (3.01)	77 (80)
3科目全体	1.59 (0.21)	-0.67 (0.42)	1.20 (0.30)	1.20 (0.37)	81.88 (6.42)	33.80 (6.43)	190 (196)

#### 4.3.3 2017年度の授業評価:

##### 授業評価項目等の相関係数

つぎに、表3にある「出席状況」「自学自習」「達成感」「満足度」「成績」「TOEIC IP」「履修者数」の7項目についてピアソンの積率相関係数を求め、表5に示した。ハドリー(2016)およびハドリー(2018)と同様に、今回の調査でも高い正の有意な相関が認められたのは、やはり「達成感」と「満足度」の間だけであった。また、「成績」と「出席状況」「達成感」「満足感」との間には、それぞれ低い正の有意な相関が認め

られた。一方、意外なことに、「成績」と「自主学習」との間には、ハドリー(2016, 2018)ではみられなかった低い負の有意な相関が確認された。これは上述のように「自学自習」の解釈の違いからはからずも生じた可能性も否定できないが、おそらくは、英語運用能力の高い学生が短時間の自学自習で好成績を収めることができる一方で、運用能力の低い学生は自学自習に時間をかけねばならない、という傾向が助長されたのではないかと考えられる。具体的な状況把握のために、質的研究による説明が求められるところである。

表5 2017年度授業評価項目等の相関係数

	出席状況	自学自習	達成感	満足度	成績	TOEIC IP	履修者数
出席状況	1.00						
自学自習	-.10	1.00					
達成感	.06	-.06	1.00				
満足度	.11	-.16	.87*	1.00			
成績	.30*	-.22*	.27*	.30*	1.00		
TOEIC IP	.26*	-.15	.12	.09	.20*	1.00	
履修者数	.43*	-.12	-.19*	-.14	.04	.04	1.00

\*. 相関係数は1%水準で有意(両側)

## 5. まとめと今後に向けて

本稿では、クォーター制が導入された2017年度および2018年度の新潟大学全学英語教育カリキュラムの成果を、TOEIC IP スコア、NetAcademyを使用した課外学習状況、学生による授業アンケート調査、教員による成績評価、クラス・サイズの各データを用いて検証した。移行前の調査結果（ハドリー 2016, 2018）と比較すると、TOEIC IP 平均値の伸長および学生の授業に対する「達成感」「満足感」に上昇がみられた。2011年度に改定された全学英語教育カリキュラムが安定的に運営され、一定の教育的効果が現れていることが示唆されたといえよう。他方、クォーター制導入後に「自学自習」の時間数が著しく減少したことは、先行研究と大きく異なる結果となった。この背景には、上述のとおり本学のアンケート調査票上の「自学自習」の定義があいまいであったことに加え、大学によりクォーター制の形態だけでなく、クォーター開講科目と Semester 開講科目との割合が異なること、さらには専門科目と教養科目との違い等があるのではないかと推測される。加えて、今回の調査では「自学自習」と「成績」との間に低い負の相関が確認された。これらについては、今後質的研究による説明が望まれるところである。

本研究の限界として、第一に、分散分析が用いられているのが TOEIC IP のみであること挙げられる。今後は他のデータでも分散分析を用い、年度ごとの差異を確認する必要がある。つぎに、一般学術目的の英語運用能力の育成を目的とするカリキュラムにおいて、日常生活やビジネス関連の英語運用能力を測定する TOEIC の受験を課していること、加えてその受験が1年次の1回のみであることが指摘される。適切なテストを少なくとも事前・事後の2回実施すべきであることは、著者も当初から主張しているところである（ハドリー 2014, 2016）。しかしながら、学内での外部試験実施における運営上の諸問題や学生の金銭的負担の増加等の理由で、いまだ実現に至っていない。

新潟大学では、全学英語教育カリキュラムの全面的改革が2020年度から6学部で実施されている。本研究結果を担当教員にフィードバックしてFDを開催するなど、可能なところから改善に向けて着実に取り組むことが求められよう。

## 謝辞

本稿で使用したデータは、新潟大学学務部教務課の神長真晴氏、長谷川美緒氏、江部早苗氏よりご提供いただきました。また、査読者の方々からは大変有益なコメントをいただきました。ここに記して感謝申し上げます。本稿に誤りがあれば責任はすべて著者にあります。

## 参考文献

- 近田政博 (2018) 神戸大学における2学期クォーター制導入をめぐる課題. 大学教育研究 26:103-118
- ハドリー浩美 (2016) 新潟大学全英語教育カリキュラム改定の成果検証. 新潟大学高等教育研究 4:1-9
- ハドリー浩美 (2018) 新潟大学全英語教育カリキュラム改定の成果検証 (2). 新潟大学言語文化研究 22:25-32
- 今滝暢子, 濱田彰, 小林雄一郎, ミシェル・ジョンソン, イアン・エルズワース, 福岡悦子, 羽田美也子, クリストファー・ヒューイット, 石部千紗, 石塚操, 木下ひろみ, 小暮正人, ケヴィン・ミラー, 大木富, ジェイコブ・シア, 嶋田和子, 矢部直己 (2019) 生産工学部のクォーターシステム下における英語必修科目運営状況の報告. 日本大学生産工学部研究報告 B 52:1-6
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会作成資料 (2012, 2013, 2014, 2015, 2016, 2017, 2018, 2019) TOEIC IP テスト平均スコア比較表【2011年度～2018年度】国立大/公立大/私立大別
- 中釜達朗 (2019) 授業外学修時間と作業量に対する適応度を指標とした教育効果の二次元的評価. 工学教育 67 (2):26-31
- 新潟大学全学教育機構英語教育企画開発室 (2010) 平成23年度全学英語カリキュラム改定について. [http://www.iess.niigata-u.ac.jp/eigo/english\\_education/3rd\\_FD2.pdf](http://www.iess.niigata-u.ac.jp/eigo/english_education/3rd_FD2.pdf) (参照日 2019.05.20)
- 西本佳代 (2017) 全国国立大学におけるクォーター制等の導入・実施状況について. 香川大学教育研究 14:7-15
- 小川勤 (2016) 共通教育のカリキュラム改革における成果と課題に関する研究—アンケート調査からみる成果と課題—. 大学教育 13:1-11
- 齊田智里 (2009) 大学英語教育カリキュラム改革による授業評価と成績評価の改善報告: 全学授業評価調査データ分析による改善効果の検証. *ARELE: annual review of English language education in Japan* 20: 271-280

### SUMMARY

This paper represents the most current results of a continuing investigation on an evaluation of the revised English language education curriculum at Niigata University, Japan, with particular interest in the quarter system that was introduced in 2017. The following data were collected and analyzed: TOEIC IP scores, hours spent out-of-class in e-learning, student evaluation of classes, teacher assessment of student achievement, and class size. The steady and positive effect of the curriculum was observed in TOEIC results and student evaluations. On the other hand, a decline was noted in the amount of time spent in self-directed learning, which calls for qualitative research aimed at gaining greater insight into the underlying issues.

KEYWORDS: ENGLISH LANGUAGE  
CURRICULUM EVALUATION,  
QUARTER SYSTEM, TOEIC, OUT-OF-CLASS  
STUDY, STUDENT EVALUATION

---

2020年6月15日受理

† Hiromi Hadley\*:

An evaluation of the revised English language curriculum at Niigata University III: Focusing on possible impact of the newly-introduced quarter system

\*Common Literacy Center, Institute of Education and Student Affairs, Niigata University, 8050 Ikarashi 2no-cho, Niigata City, Niigata, 950-2181 Japan